

当事者の視点から見た大学受験競争の実態 —インタビュー調査を通して見えた中国人留学生の認識—

周 亜芸*・梅本 佳子*・高田 亮*

Understanding the Condition of University Admission Competition by Interviewing Chinese Students and Analyzing Their Perspective

Yayun ZHOU *, Yoshiko UMEMOTO * and Ryō TAKADA *

抄 録

本研究では、中国人留学生9人に対して半構造化インタビューを行い、中国及び日本の大学受験競争の実態と、それに対する中国人留学生の認識を調べた。インタビューデータはKJ法で分析し、その結果、中国の大学受験競争は激しく、中国人留学生は受験勉強の大変さやプレッシャーを感じていることが分かった。また、中国での大学入試に失敗し、それが日本留学のきっかけとなっていることも明らかになった。しかし、来日後、日本の大学を受験してやり直そうとしたが、日本での受験勉強や大学入試は予想以上に難しいと感じていることが窺えた。結局、希望していた日本の大学に入れず、今の大学に進学せざるを得なかった。中国と日本両方の大学受験に挫折して自己を否定的に捉えている中国人留学生が多かったが、現在の大学で学習方法を身につけ、勉強の意味を考えるようになったという中国人留学生もいた。

キーワード: 中国人留学生 大学入試 受験競争 日本留学 KJ法

1. はじめに

2000年以降、グローバル化が進む中国では、名門大学卒の肩書が国際社会で勝ち抜くために重要だと捉えられるようになり、熾烈な大学受験競争が展開されている。最新の調査によると、2021年の中国における普通高等学校招生全国统一考試（日本の大学入学共通テストに相当）の受験者数は約1,078万人で、2021年の日本の大学入学共通テストの受

験者数、約54万人の20倍程であり、中国の数少ない名門大学に入るために激しい競争が繰り広げられている（中华人民共和国教育部, 2021）。また、中国では「いい大学=いい仕事=いい生活」という固定観念が浸透しているため、当事者の学生だけではなく、その親も大学受験に全身全霊を打ち込んでいる。そのような学生の中には、中国の受験競争を勝ち抜き、中国の大学に進学する人もいる一方、受験競争に敗れて海外の大学に進学する

* 筑波学院大学 経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

中国人留学生も増え続けている。そして、地理的・文化的にも近い日本に来て受験競争を続ける中国人留学生も多く、彼らは日本の大学に進学するために日本語学校での日本語学習と並行して、大学受験に特化した進学塾に通うことも少なくない。

来日する全留学生の中で中国人が占める割合は一貫して大きいのが、近年その質には変化が見られている。以前の自分で学費・生活費を稼ぎながら勉強する留学生に代わって、親からの仕送りで生活できる留学生が増えており、この変化は留学生の持つ自己像にも影響を与えている。従来の「夢の実現を目指して頑張る自分」という肯定的な自己像に代わり、「競争に勝てない存在」や「両親の期待に応えられない存在」という否定的な自己像を持つ者が多くなっているのである（中島, 2016）。

日本の高等教育機関では、留学生がビジネス日本語や就職のために必要な知識・技術を身につけられるよう、キャリア支援を行っている。しかし、否定的な自己像を持った留学生は支援を受けても自分のキャリアを主体的に考えられず、その有効性は限定的だと思われる。そのため、否定的自己像から肯定的自己像への転換を直接的に働きかける新たな大学教育の構築が喫緊の課題である。

したがって、本研究では、中国人留学生が否定的自己像を持つに至った経緯を知るために、中国及び日本の大学受験競争の実態とそれに対する彼らの認識を明らかにする。それによって、中国人留学生自身が否定的な自己像から肯定的な自己像へ転換し、社会の主体として生きていく力を養うための大学教育の構築を目指す。

2. 先行研究

2.1. 中国の大学入試競争の実態及びそれに対する捉え方に関する先行研究

中国の大学受験の実態については、受験競争を実際に経験した中国人学生を対象に調査が行われている。劉（2017）は河南省の大学受験生を対象にした質問紙調査を行い、日常生活のほとんどが勉強に費やされる受験生の精神的健康は非常に厳しい状態にあり、受験においてストレスの原因を多く抱えるほど、抑うつ傾向が強まるとしている。Liu and Helwig（2020）は北京と西安の大学受験生を対象にインタビュー調査をしている。同調査によると、受験生は大学入試の存在が勉強への動機づけになっていることを認めつつも、大学入試は競争が激しく苦痛であり、親に心配されたり、自分の成績が他人からどう見られているかを気にしたりすることがストレスの原因になっていると述べている。

また、中国人学生が中国の大学入試制度についてどのような意見を持っているかについて調べた研究もある。いずれの調査でも、中国人学生は全国统一試験という入試制度自体はおおむね肯定的に評価している（Muthanna & Sang, 2015; 付・賀, 2013; 郑・刘, 2015）。その一方で、少数民族出身受験者への加点制度や都市部と農村部の教育格差、さらに暗記重視の試験問題に対して不満を持っており（Muthanna & Sang, 2015）、入試の評価基準についても否定的な意見が多い（付・賀, 2013）。中国人学生は現行の入試制度を改善すべきだと主張するが（Liu & Helwig, 2020）、廃止すべきとの意見は見られず、各大学が独自の入試制度を導入した方がむしろ公平性が損なわれると危惧している（郑・刘, 2015）。このように、中国人学生は入試制度の欠陥を認めながらも、制度全体としては支持する、いわば、総論賛成、各論反対という考えを持っていることが分かる。

2.2. 日本の留学生大学入試競争の実態及びそれに対する捉え方に関する先行研究

日本の大学入試については、実際にそれを経験した中国人留学生から直接聞いて行われた研究はあまり多くない。張（2013）は日本語学校に在籍している中国人留学生にインタビューを行った。張によると、初めから日本進学を考えている留学生は日本の有名大学を目指し、早くから留学の準備をしていた。その一方、中国国内の受験に失敗したため来日した留学生は、日本で良い大学に進学したいという希望を持っているものの、日本の大学入試を甘く見ている傾向があるという。謝（2014）も日本語学校の中国人留学生を対象にアンケート調査を行っている。同調査からは、留学生は来日から時間が経つにつれて、疲れや無気力感を感じるようになることが分かる。そして、その原因は理想と現実の格差、すなわち、高い期待を持って来日した留学生が、次第に自分が入学可能な大学のレベルに気づくことにあると推測している。その他にも、中国人留学生を対象とした研究はあるものの、異文化適応や留学の目的についての調査が多く、大学入試競争の実態やそれに対する留学生自身の捉え方に焦点を当てた研究は少ない。

3. 研究課題

本研究では、中国の大学入試で失敗を経験し、その後日本に来て大学入試に再びチャレンジした中国人留学生に焦点を当て、次の研究課題を設定した。

- ①中国人留学生が経験した中国及び日本の大学受験競争はどのようなものだったか。
- ②中国人留学生は自身が経験した中国及び日本の大学受験競争をどのように捉えているか。

4. 研究方法

4.1. 調査対象者

筆者が勤務している T 大学は日本の地方にある小規模私立大学である。T 大学には留学生が約150名在籍し、そのうち中国人留学生が約8割以上を占める。筆者が普段携わっている留学生センターの業務及び日本語の授業での学生とのやりとりから、中国人留学生の多くは中国の大学入試に失敗し、日本でやり直すために留学に来たということを知った。そこで、そのような経験をした中国人留学生に声をかけたところ、9名が調査対象者（全員仮名、A～I）として協力してくれた。この9名はインタビューした当時は全員1年生であり、入学してからまだ3ヶ月ほどしか経っていないため、中国及び日本の大学受験競争の実態に対する記憶がまだ新しいと考えられる。また、筆者（代表者）は調査対象者と中国語（標準語）でやりとりができ、インタビューをスムーズに実施できる。さらに、筆者（代表者）自身も中国人で元留学生であるため、調査対象者と同じ目線に立ち、彼らの内心を引き出しやすいと考えられる。

調査対象者 (仮名)	来日時期	日本で受験した 大学の数	日本で日本語学校と 塾に通った期間
A	2019年 4月	3校	日本語学校（2年） 塾（2年）
B	2019年 9月	3校	日本語学校（1年半） 塾（1年）
C	2019年 4月	4校	日本語学校（2年） 塾（2年）
D	2019年 7月	5校	日本語学校（1年半） 塾（1年）
E	2019年 7月	1校	日本語学校（1年8か月） 塾（1年）
F	2020年 11月	1校	日本語学校（半年）
G	2019年 9月	4校	日本語学校（1年半） 塾（1年半）
H	2019年 11月	2校	日本語学校（1年4か月） 塾（1年）
I	2019年 10月	4校	日本語学校（1年5か月） 塾（1年）

4.2. 調査方法

本研究では、2021年7月にT大学の教室の一室で半構造化インタビューを実施した。中国人留学生の中国及び日本での大学受験生活とそれに対する認識に注目し、以下のように質問項目を作成した。インタビューの時間は1人あたり60分～90分となる。インタビューの内容は調査対象者の同意の上で、ICレコーダーに録音し、すべて文字化し、その資料を分析データとした。文字化した資料の原文は中国語だったが、抽出したデータは全部日本語に訳した。

インタビューの質問項目

- (1) 中国での高校生活はどのようなものでしたか。それをどのように捉えていますか。
- (2) 中国での大学入試の結果はどうでしたか。それをどのように捉えていますか。
- (3) 日本で大学入試を受けた理由やきっかけは何ですか。日本の大学入試についてどう思いますか。
- (4) 日本の日本語学校や塾の勉強や生活はどうでしたか。それをどのように捉えていますか。
- (5) 今の大学生活はどうですか。それをどのように捉えていますか。

4.3. 分析方法と手順

半構造化インタビューデータは川喜田(1986)のKJ法により分析した。KJ法は調査対象者の主体的解釈に注目する質的データ分析法であり、個々人の声を埋没させずに、雑多で無秩序に見えるようなデータを構造的に組み立てられることが特徴である。本研究では、中国人留学生へのインタビューを通して中国及び日本の大学受験競争の実態を把握し、それに対する彼らの認識を明らかにすることを目的とする。そのため、調査対象者の個性を損なうことなく、また関連性も明示できる分析手法としてKJ法が妥当であると考え援用した。

インタビューから抽出されたデータの分析はKJ法のプロセスに従い、以下のように行った。

①ラベル作り

上述した中国人留学生へのインタビューを全て文字化した後、内容を熟読し、その中から中国と日本の大学受験及びそれに対する認識の内容に該当する記述を抽出する。そして、まとまった意味ごとに一つのラベル(紙/付箋)に記入し、簡潔な見出しを作る。

②ラベル集め

ラベルに記載された内容が似たもの同士を集め、その集まりに一つの名前(表札)をつける。これを第2段階のラベルとする。同じやり方でラベル集めと表札づくりを繰り返し、抽象化を第3段階、第4段階と上げていく。中に、どこにも所属できないようなラベルがあるとき、無理にまとめず、「単独ラベル」として保留する。

③グループ編成と結果図の作成

抽象化したラベルを空間配置し、ラベルを移動させながら、関連性があるラベル同士を一つのグループとして編成する。時系列、並列、対立などのグループの関係を表す矢印や記号を使って、データ全体を図解化する。

④ストーリーラインの作成

結果図を参考にし、具体的な内容をまとめたストーリーラインを作成し、課題の答えを導くよう文章化する。

より客観的な結果を得るために、以上の作業を行う時、個人で分析することを避け、筆者3人(中国人日本語教員1名、日本人日本語教員2名)が共同で意味確認をしながら進めていく。

5. 分析結果と考察

インタビューの音声データをすべて文字化した上で、中国及び日本の大学受験に関する記述を拾いあげ、合計330枚のラベルを作成

した。さらに、4.3の分析方法を用いて、ラベルを整理、分類し、第5段階まで抽象化を進めた。第5段階のラベルをグループ化し、最終的に合計8つのグループを編成した。各グループを【 】で表示し、関連性を可視化するために結果図（図1）を作成した。以下では図1を踏まえて、ストーリーラインを述べる。なお、単独ラベルを“ ”、第1段階から第4段階のラベル名をそれぞれ〈 〉、《 》、[]、{ } で表示し、図1にある第5段階のものは[]で示す。

最終的に編成された8つのグループの名称は、①【中国の高校生活（受験勉強）】、②【中国の大学入試結果】、③【日本留学のきっかけ】、④【日本の大学受験勉強（日本語学校と塾）】、⑤【日本の大学入試と結果】、⑥【現在の状況】、⑦【親の影響】、⑧【人生観】であり、それぞれ関連する第1段階～第5段階までのラベルが集約されている。

以下、全体の構図（図1）を踏まえ、各グループの内容について解説していく。

図1を見ると、①から⑥のグループは、インタビューを受けた留学生たちの高校から大学（現在）までの時系列に沿った流れとなっている。また、⑦は①から⑥までのグループに対し影響を与え、さらに、⑧は⑦を含めすべてに影響を与える位置にあることが分かる。

①【中国の高校生活（受験勉強）】

中国人留学生は母国で体験した大学受験競争について、主に「高校生活は忙しくて大変だ」という捉え方をしており、「先生や親からのプレッシャーが大きかった」「中国の受験教育は精神的負担が大きい」という精神的な負担を感じている。こうした厳しい受験勉強の影響として、自己を否定的に捉える「私は勉強に向いていない」や、「高校に入ってから学習意欲が減少した」といった自身の勉強への取り組みに対する負の影響を述べてい

る。一方、肯定的に捉える留学生も見られ、「中国での受験勉強はあまり大変じゃなかった」とする意見や、「大変だが何とかなる」とする意見も見られた。

大学入試に関しては、「中国の大学入試のプレッシャーは少なかった」というラベルもあった。しかし、これは美術系大学を目指す学生や、始めから留学志向が強い学生からの少数意見であり、通常の大学受験生にとってはプレッシャーが非常に大きいと思われる。また、中国の受験勉強については、「中国の教育は実践的ではなく役に立たない」、「中国の受験勉強には良い面もある」という捉え方の対立が見られた。

②【中国の大学入試結果】

①【中国の高校生活（受験勉強）】を経て、②【中国の大学入試結果】では、「中国で大学入試がうまく行かなくて悔しかった」となり、「高校時代に勉強しなかったことを後悔している」という意見が見られた。一方、「中国の入試の結果を後悔していない」という意見も見られたが、この中には第2段階で抽出されたラベル《後悔はない。結果を受け入れるしかない》という、諦めの気持ちも含まれている。

中国の大学入試制度について、留学生は「中国で志望大学の選択には不確定要素が多い」「地方によって難易度が違うので、中国の入試は公平ではない」とその不備を指摘している。とはいえ、「全ての人にチャンスがあるので中国の大学入試は廃止しない方がいい」という捉え方もあり、これらを総括して、「中国政府は教育の平等化に投資しないといけない」というラベルが結論に位置づけられる。

③【日本留学のきっかけ】

日本留学の動機として、上記②で挙げた「中国で受験がうまく行かなかったので日本に留学した」が主流であり、この中には第3

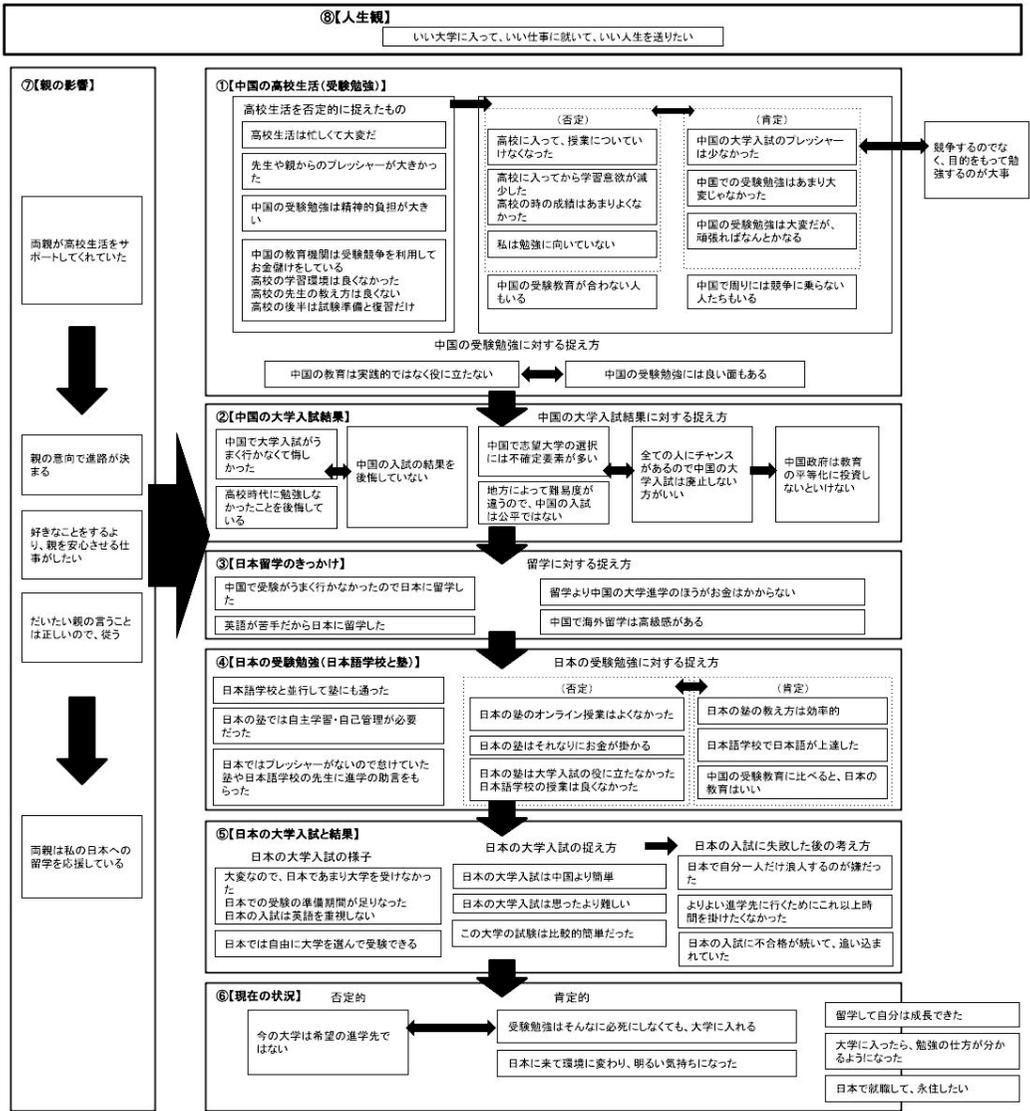


図1 結果図

段階において抽出された「日本でやり直そうと思った」、「希望の大学に行けなかったので、日本に留学した」といったラベルが含まれている。更に「英語が苦手だから日本に留学した」というラベルも見られるが、よりよい進学先としての英語圏の欧米諸国への留学を諦め、日本に留学せざるを得なかったという、消極的な選択であることが共通する。

④【日本の大学受験勉強(日本語学校と塾)】
留学後、日本での受験勉強の様子として「日本語学校と並行して塾にも通った」「日本の塾では自主学習・自己管理が必要だった」という受験勉強の負担が見られ、中国の受験競争から脱しても、日本で再び受験勉強をする大変さが表れている。その一方で、「日本ではプレッシャーがないので怠けていた」と

いう中国の受験競争から解放された様子も見られた。

⑤【日本の大学入試と結果】

④【日本の大学受験勉強（日本語学校と塾）】の後、日本での大学入試に際し、[大変なので、日本であまり多くの大学を受けなかった][日本での受験の準備期間が足りなかった]といった、順調とは言えない様子が見られた。このような状況から、中国人留学生は日本の大学入試について、[日本の大学入試は中国より簡単]と捉えつつも、[日本の大学入試は思ったより難しい]と感じている。また、日本での大学入試の結果を受け、[日本で自分一人だけ浪人するのが嫌だった][これ以上時間を掛けてまでより良い進学先に行こうとは思わなかった][日本の入試に不合格が続いて、追い込まれていた]といった理由から、本来の希望の進学先ではない現在の大学への入学を決めたことが窺える。

⑥【現在の状況】

④【日本の大学受験勉強（日本語学校と塾）】及び⑤【日本の大学入試と結果】の経緯を経て、[今の大学は希望の進学先ではない]という調査対象者の気持ちが読み取れる。ただし、日本での受験に失敗したという現在の自分を否定する意識ばかりではなく、[受験勉強はそんなに必死にしくなくても、大学に入れる][日本に来て環境が変わり、明るい気持ちになった]といった受験競争からの脱却や、[留学して自分は成長できた][大学に入ったら、勉強の仕方が分かるようになった]といったポジティブな気持ちの変化も見られた。

⑦【親の影響】

①から⑥までの時系列に並行して寄り添うのが、⑦【親の影響】のグループである。まず、生活面では[両親が高校生活をサポート

してくれていた]に加えて、①【中国の高校生活（受験勉強）】にも[先生や親からのプレッシャーが大きかった]というラベルが見られた。また、進路の選択に関わる[親の意向で進路が決まる][好きなことをするより、親を安心させる仕事をしたい][だいたい親の言うことは正しいので、従う]、留学後の[両親は私の日本への留学を応援している]といったラベルも見られた。このように、中国人留学生の受験勉強や進路選択に、親の意向が大きく関与していることが分かる。

⑧【人生観】

①から⑦までのグループは大きく⑧【人生観】に影響されている。このグループには第5段階で集約された[いい大学に入って、いい仕事に就いて、いい人生を送りたい]というラベルを含む。中国の受験競争の根底には、いい人生を送るために受験競争に勝ち抜き、いい大学に入る必要があるという意識があるが、中国でも日本でも「いい大学」に入れなかったことで、否定的な自己像が生まれることが推測される。また、⑦【親の影響】においても、第3段階の[親は私を大学に行かせたいと考えていた][親は私を英語圏の国に留学させたいと考えていた]といったラベルから、親も共通の認識を持っており、そこから更に中国人留学生の大学受験に対する捉え方に影響を与えていることが考えられる。

〈単独ラベル〉“競争するのではなく、目的をもって勉強するのが大事”

⑧【人生観】の影響から外れるものとして、単独ラベル“競争するのではなく、目的をもって勉強するのが大事”がある。これは中国の受験競争のシステムの中で、その大変さやプレッシャーを否定的あるいは肯定的に捉える意識とは別に、受験競争のシステム自体を超越して勉強の本質を見据える視点である。

また、上記と共通する視点を持っているの

が、⑥【現在の状況】の一群〔留学して自分は成長できた〕〔大学に入ったら、勉強の仕方が分かるようになった〕〔日本で就職して、永住したい〕である。特に前者2つは、留学生が日本の大学での学びを通して、勉強の意義について発見できたことが窺える。

全体のストーリーラインは、主流となる⑧【人生観】に影響され、中国人留学生の高校時代から現在までが時系列に沿って流れている。まず①【中国の高校生活（受験勉強）】で中国での大学受験生活の大変さが浮かび上がり、その結果である②【中国の大学入試結果】で「いい大学」に入れなかった挫折が③【日本留学のきっかけ】へとつながる。留学後の④【日本の大学受験勉強（日本語学校と塾）】では、日本の大学受験の大変さや、中国でのプレッシャーから解放されて勉強意欲が持てない様子が見られ、⑤【日本の大学入試と結果】で中国ほどではないものの日本の大学受験の厳しさを実感したことが分かる。⑥【現在の状況】では、日本でも希望の「いい大学」には入れなかったという悔しさと、希望の大学ではないが現在の大学で学びを得たというポジティブな気持ちが見られた。⑦【親の影響】は高校時代から現在までの随所に見られ、中国人留学生達の進路選択を左右する影響力があることが推察された。

受験競争に対し、必ずしも否定的な捉え方ばかりではなく、肯定的な捉え方も見られたが、中国の受験競争での熾烈さは学習意欲にまで影響を及ぼしている。また、いい人生を送るためにはいい大学に入らなければならない、という重圧が中国人留学生にとっていい大学に入れなかった自分を否定的に捉える要因となっている可能性がある。それに対し、単独ラベル“競争するのではなく、目的をもって勉強するのが大事”は、現在の自分を肯定的に捉えるための重要なキーとなる。調査対象者の中では希少な意見であるが、勉強

ひいては大学での学びが本来どのような意義を持つかということに目を向けるきっかけとなり得る。

6. おわりに

本研究では、中国及び日本の大学受験競争の実態と、それに対する中国人留学生の認識を調べた。中国人留学生9人に対して半構造化インタビューを行い、インタビューデータをKJ法で分析した。分析の結果、中国の大学受験競争は激しく、中国人留学生は受験勉強の大変さやプレッシャーを感じていることが分かった。また、中国での大学入試がうまく行かず、それが日本留学のきっかけにつながっていることも明らかになった。しかし、来日後、日本語学校と塾に通い、日本の大学を受験してやり直そうとしたが、日本での受験勉強も大変で、大学入試も予想以上に難しいと感じている様子が見えた。結局、日本でも希望の大学に入れず、仕方なく今の大学に進学した。今の大学に入ってから学習方法を身につけ、勉強の目的と本質を捉え直したという中国人留学生もいたが、中国と日本両方の大学受験競争に挫折して自分の現状を否定的に捉えている中国人留学生が大半であった。「いい大学に入り、いい仕事に就き、いい人生を送りたい」という観念が一般的に浸透する中、中国人留学生はその道筋から外れたことで躓きを感じたり、否定的に自分の現状を捉えたりしてしまうことが推測された。

しかし、彼らが社会の主体として人生を生きていくためには、その固定観念から脱却することが重要である。分析結果からは、学生のみでなく、彼らの親も同様の固定観念に囚われていることが見られ、こういった環境の中で学生が自身の力のみで自己像を転換することは難しい。大学教育は、学生が競争社会の構造の中で自分を肯定して生きていくことができる学びを提供するべきである。そのた

めには、まずは固定観念に囚われている自分自身の状況を認識できるよう、自己と社会の関りを捉えなおす教育の実践が必要である。自分の人生を豊かにするための学びに主眼を置き、大学教育と教員自身が競争社会を批判的に捉え、広い視野で社会を見ることを教示しなければならないと考える。一方的な教員主導の教育ではなく、対話や学生主体の活動を取り入れることも有効であろう。大学での目的を持った勉強が、競争社会での勝敗の意識を乗り越え、新たな自己像を造形し、自己肯定につながるのではないだろうか。

ただし、本研究の調査対象は一つの大学の中国人留学生9人のみであるため、これを中国人留学生全体の認識と捉えることは早計である。今後は、調査対象者を増やして今回の結果をさらに検証し、受験競争で挫折した留学生自身が否定的な自己像から肯定的な自己像へと転換できるような大学教育のあり方を模索していきたい。

謝辞

インタビューに協力してくださった中国人留学生のみなさんに感謝申し上げます。本稿は、2021年度筑波学院大学共同研究資金の補助を受けて実施されています。

参考文献

- 川喜田二郎 (1986) 『KJ 法—混沌をして語らしめる』中央公論社
- 謝延瓊 (2014) 「日本語学校における中国人留学生の異文化ストレスと無気力感に関する研究」『九州大学心理学研究』15, 53-61. <https://doi.org/10.15017/1516135>

- 張梅 (2013) 「私費留学生の進学意識と進路決定：日本語学校在籍者へのインタビュー調査から」『東京大学大学院教育学研究科紀要』52, 169-181. <https://doi.org/10.15083/00031075>
- 中島恵 (2016) 『中国人エリートは日本をめざす：なぜ東大は中国人だらけなのか?』中央公論新社
- 劉艶艶 (2017) 「中国における大学受験生のストレスマインドセットと精神的健康との関連」『人間文化創成科学論叢』20, 183-191. <http://hdl.handle.net/10083/00062282>
- Liu, G. X. Y., & Helwig, C. C. (2020). Autonomy, social inequality, and support in Chinese urban and rural adolescents' reasoning about the Chinese college entrance examination (Gaokao). *Journal of Adolescent Research*, 37(5), 639-671. <https://doi.org/10.1177/0743558420914082>
- Muthanna, A., & Sang, G. (2015). Undergraduate Chinese students' perspectives on Gaokao examination: Strengths, weaknesses, and implications. *International Journal of Research Studies in Education*, 4(5). <https://doi.org/10.5861/ijrse.2015.1224>
- 付嫦娥・賀良 (2013) 「基于考生诉求的高考制度改革刍议」『当代教育论坛』(02), 42-45.
- 郑若玲・刘婧婧 (2015) 「弱势群体对高考公平性之评价——基于农村高中生的调查」『现代大学教育』(01), 9-14, 39.
- 中华人民共和国教育部 (2021年6月3日) 「2021年全国高考报名人数1078万」http://www.moe.gov.cn/jyb_xwfb/xw_zt/moe_357/2021/2021_zt12/meiti/202106/t20210603_535277.html (閲覧日2022年8月20日)